

SBC マットの使用報告

I. はじめに

平成17年2月にWHOのコーデックス委員会報告を受けて、日本でも有機畜産物の認定機関、検査員制度を確立すべく、研修会が発足していることは昨年の農業政策の見直しによる。

平成16年5月24日、首相官邸で開催された第3回食料・農業・農村政策推進本部（本部長：内閣総理大臣）において「有機畜産物JAS規格など、国民のニーズに対応した新たな規格を順次制定」することが答申された。

今日までの我が国の安全食肉政策は、国民の健康を考慮して豚肉に残留薬品が残らないように投与時期を定めて、ワクチンプログラムを設けワクチンや抗生物質の投与を指導している。

ワクチンプログラムの1例

マイクログラズマ性肺炎、胸膜肺炎、オーエスキー病、豚丹毒、日本脳炎等に関する投薬を週間隔で投与する。

（購入規模により差があるが1頭当たりの合計金額は約3,000円）

場内消毒薬品

次亜塩素酸による場内消毒を行う。

一方、国際的にはコーデックス委員会（WHO/FAO 合同食品規格委員会）において平成9年に有機畜産物のガイドライン検討が開始され、平成13年に正式に採択された。

有機畜産物とは、飼料や飼育場から投与薬品が食肉に残留することを規制するために、母豚の段階から、治療以外の投薬を禁じ、食肉の安全を厳しく求めた飼育方法で飼育された畜産物。

我が国でも、農林水産省において有機畜産の検討がなされている。
ここから有機畜産に関する資料を検索できます。

[農林水産省のホームページ参照](http://www.maff.go.jp/lin/03-keiei.html)

<http://www.maff.go.jp/lin/03-keiei.html>

2. SBC マットの使用農家の現状

一貫生産養豚を家族3名でされている小規模養豚場（母豚80頭）での6ヶ月間使用感想

話し手 A様

聞き手 迫田 茂実

1、 この豚舎では臭気が減少したようですが？

確かににおいがすくなくなった。

通常飼育場の飼育場付近ではアンモニア濃度60～90ppmが観測される。SBC マットの飼育場ではアンモニア濃度5～8ppmであった。

2、 最近場内のハエや蚊が少なくなったようですが？

場内の消毒剤を減らしても、敷材が排泄物を完全に分解するときの熱で蛆虫の卵が死滅しハエがいなくなった。おかげで投薬代金1ヶ月20ℓ缶代20,000円を削減できた。

この場内消毒作業時間に週1時間労働が省力化された。

3、 昨日、ワクチンの件で畜産関係者をたずねたら、ワクチン投与は標準指導事項ですか？

標準的にはワクチンプログラムの飼育方法が順当ですよ。

(投与に多量の人件費を費やす)

(生後から出荷までの間に約10回の投与)

当農場では、給食用に出荷することから投薬を削減してきた。

今回、SBC マットを使用するパッドクでは一切使用していない。

安全食品の生産で投薬時間と投薬品代1頭約3,000円が削減される。

年間480万円ぐらいかな(80*10*2回*3,000円)

4、 飼育期間が早まったと伺いましたが？

出荷時期が10日早まった。

当飼育場では170日を標準に過去20年間飼育してきたがこの方法で160日出荷ができる。

飼料費の削減と年間出荷のサイクルが早くなり、生産出荷頭数が約5%増えるかな。

5、 事故率も減少していると奥様が言われていましたが？

確かに少なくなった。

豚が元気になった。顔色がいいよ。

当農場では、一貫生産をしていることから子豚から出荷までの事故率が約2%とあった。

SBCマットで30kgから飼育すると子豚の足腰が強くなり年間換算で約1%へ半減するかな。

出荷頭数がその分約40頭増加する。

6、 出荷単価が安定していると聞きましたが？

有機畜産物は今の単価から2倍から5倍は高くなると書いてあるよ。

(農林水産省 有機畜産物参照)

当農場では、生産肉の品質と質量が安定し、枝肉換算の歩留まりで約3割アップしているかな。

7、 またJA以外のスーパーからも引合の電話があると聞きましたが？

夜になるとよく電話あるが生産が出来ないよ。

最近SBCマット飼育方法を導入された農家で、以上7点の特徴が見られた。SBCマットを使用する農家では、有機畜産物への取り組みが開始されていることが実感できた。

また、別の農家では同じ敷地内に高層階での飼育豚舎を計画中し、生産量を2~3倍に拡大する、都市部近郊農家のからSBCマット専用豚舎の引合がある。
(補助金協議中)